

進む農家と研修生 の関係づくり



女性の研修生たち



農家ニーズ調査、苗配布、事後調査を行った
サミールさん(24歳)

「農家とじかに接することができてとても有意義でした。農家の豊富な経験から学ぶことは多く、同時に研修で得た新しい技術や栽培手法の知識や情報を伝えることができます。中部にナスと唐辛子苗の配布に行った時、『キュウリを栽培したいのだが、水や病害の問題があるので無理だ』という話を聞き、病気に耐性のある接木キュウリ苗について伝え、新しい技術に対しては保守的な態度をとることが多い農家が強い興味を示してくれました。」

「ナキール農場の作業員たちに指導をしてもらいました。彼らはそれぞれ自作農家です。彼らから技術や知識はもちろん、農家と接する態度や話し方というのも同時に学ぶことができました。将来はこの接木という技術をできるだけ多くの農家に広める仕事に従事したいと思います。」

育苗の技術指導を行っている現地スタッフは「より責任感の伴う作業を通して、研修生のうちすでに5名は自力で接木を行うことができるようになりました」と話します。研修生たちはこの他にデータ入力サポートや簡単な翻訳作業も行っています。

農業支援事業は、技術を広めるだけでなく人材育成も大きなテーマです。イスラエル軍による施設の破壊によって大学では十分な実技講習を受けられなかった研修生たちは、この研修を通して実践的な技術や知識を習得します。農家に配布する計画にそって種子をまき、発芽割合を測り、接木を行い、育った苗を農家に配布し、現場に行き事後調査をするという一連の活動を通して経験を増やしています。そんななか知識量や経験値の違いなどから、若手の研修生が農家とのコミュニケーションをちゃんと取れないという問題の克服もテーマです。研修生の声を紹介します。

「私の行った地域では、去年、(土地の水分量を計測して節水に役立つ) テンシオメータを使い出した近くの農家も一緒に来てくれて、どれだけ水や肥料の節約に役立つかを新しい裨益者に説明してくれました。経験者の声はやはりとても説得力があり、勉強になりました。また薬剤に関して尋ねられたので、有害だから別のものに変えた方が良いとアドバイスして、その結果がうまく行くと後で感謝されました。」

農業技術者が一方的に情報を伝え、農家は苗を受け取るだけという関係ではなく、農家のニーズを知り、お互い補完し合って新しいことに取り組むという関係が今後期待できそうです。

テンシオメータ配布に
同行したアリさん(23歳)

接木作業に参加した
アミールさん(24歳)

私たち日本人スタッフは活動全体を見渡し調整を行っています。

今年目標の一つは、接木した苗の数を増やすことです。マンパワーの補強と接木技術の普及を目的に、農場での接木作業に研修生にも参加してもらいましたが、技術と熟練を必要とする作業なので、作業員と比べるとやはり成功率は高くありませんでした。そこで作業環境を改善し、作業員とスタッフの目が行き届くように工夫し、その後実技試験を行いました。

また、研修生が育苗の一連の流れを経験し、農家と対話することにも重点を置きました。

ガザではいま物不足が再び深刻になる中、持続性のある農業をどう定着させるかも課題です。将来は独り立ちしてガザ地区の農業を担う研修生に、こうした経験が糧になると信じています。